

『ユウヒノムコウ』 - 雨鼠

※お読みいただく際はブラウザの横サイズを調節してください。より快適にお読みいただけます。

「明日」

立ち止まる彼女。一片の風が吹く。まだ幾分湿り気を帯びたそれは、それでも季節が変わりゆくことを感じさせた。もうすぐ秋だねえ、なんてことを話しながら、てくてく学校から帰っても、じっとり汗ばむようなことは少なくなった。

「明日、何の日か知ってる？」

今度はこちらを振り向いて訊ねる。肩に掛かる髪が揺れた。夕陽を背にして立つ姿はなかなか絵になると思う。スケッチブックを持っていないのが残念だ。いや、でも絵は上手くないからカメラでいいや。文明の利器に頼ろう。どのみち持ってないけどさ。

「何だっけ？」

「もう」

実は覚えていたのだけれど。彼女がそうして膨れるのが見てみたかったのだ。

「遊園地に行く日」

「実は知ってた」

「嘘ばかり」

「一か月も前から計画してたんだから」

覚えてるに決まってる。しかも付き合ってから三か月だかの記念日らしい。実際すっかり忘れていたが、彼女があまりにもしつこくしつこく言うてくるので、いい加減記憶する羽目になった。

「晴れると良いねえ」

「天気予報見たら、晴れるって」

「良かった」

心底嬉しそうな笑顔を見せる。デートの計画ってというのは決して得意じゃない。一人で遊ぶことに慣れてしまったこともあり、二人で遊んでいるイメージが沸かないのだ。行ってしまえば何とかなるだろう、が通用しない青写真というのは、なかなか面倒なものだった。

それでもこうして彼女が喜んでくれればこそ、ない頭をひねった甲斐があったというものだ。

プレゼントを用意した方が良く、という姉さんの有り難いアドバイスに従って、既に首飾りを買ってある。アクセサリーショップに男一人で入るのは、それはそれは赤面ものの体験だった。できれば二度とやりたくない。付いて来てくれれば良かったのに、姉さんは姉さんで、仕事やらデートやらで忙しいらしい。社会人は大変だと思う。

「ありがと」

気がつくと、駅に着いていた。僕の家と彼女の実家とが離れているという事実はどうにも覆しようがなく、送った後にはこうして毎日号泣せんばかりの別れが待っている。

「別に泣かなくていいでしょ」

「ああ、また会えるよな」

大げさだ、と彼女は困ったように笑う。

「明日、ここで、八時ね。遅れないでよ？」

「遅れそうだから電話してくれ」

「ダメ。自分で起きて自分で来なさい」

彼女は小学生の子供を躾(しつ)ける母親のように厳しかった。

「じゃあ、またね」

彼女が改札の向こうに消えていく。

「うん、また……？」

ホームに走っていく彼女が、何だかとても遠く離れていく気がした。

まあ、当たり前か。実際遠ざかっているのだから。バカバカしい。何を感傷に浸っているのだろう。

踏切が鳴っている。もうすぐ電車が来るのだろう。踏切の音というのは心臓に悪い。「ファ」と「ソ」の不協和音を連続で鳴らし続けるという凶悪な警告音を思いついた人は、他に類を見ない才能があると思う。

電車が近づいて来たせいか、何だかその和音が歪んで聞こえる。ちょうど、電車に乗って踏切を横切ったときのように。ちょうどほら、ドップラー効果が掛かって音が歪んでいくときのような、そんな。

『行こうよ』

誰かの声。聞き覚えのある、とても懐かしい声だ。それは誰のものだったか。

しかし、それは確かに僕に向けられている。そんな気がする。

意識が音の群れに沈んでいく。

なぜだろう。とても、悲しい。

こみ上げてくるような気持ちを抑えながら、

「いい」

ようやくそれだけ答えた。

それから先の記憶がない。

「明日」

そう言って立ち止まる彼女。

気のせいだろうか。この光景を、確か昨日も見たとような気がする。

時折強い風が吹く。その風は冷たく、秋がいつそう深まったことを感じさせた。

「……違うよ」

彼女の声は透き通っていた。

「えっ？」

アブラゼミとツクツクボウシの鳴き声が聞こえて、そしてすぐに消えた。

今は、夏？

よく分からない。涼しいはずなのに、シャツはじっとりと汗ばんでいた。

「明日、何の日か知ってる？」

彼女がゆっくりと振り返って訊ねる。肩に掛かる髪が風に踊っている。そのまま溶けて流れていってしまいそうな、そんな印象すら覚える。

「知ってるよ」

冗談を言う余裕なんてなかった。だから知っていると言うしかない。けれど、よく思い出せない。本当に忘れてしまったのだろうか。大切な日だった気がする。忘れないようにと何度も言い聞かされて、そして。

「……何だっけ？」

「もう」

彼女は膨れた。

「遊園地に行く日」

そう。そうだった。遊園地に行くのだ。あんなに頑張って計画を立てたのに、どうして忘れてしまったのだろう。ど忘れって奴だ。二十歳を超えると脳細胞がガンガン減っていく、というのは本当かもしれない。まあ、記憶力と脳細胞の数は実際あまり関係ないらしいのだが。

「実は知ってた」

あはは、と笑ってみせる。忘れる訳などないのだ。

「『嘘』ばかり」

「えっ」

彼女の声がぞっとするほど冷たく、思わず声を漏らしてしまった。怒らせてしまったのだろうか。

「なーんてね」

意地悪そうな笑みを浮かべている。良かった。それほどご立腹ではないらしい。さ

すがは僕の彼女だけあって、よくできている。これしきのことではイチイチ頭に来ないらしい。

「晴れると良いねえ」

「天気予報見たら、晴れるって」

「良かった」

嬉しそうな笑顔を見せる。やっぱり計画して良かった。

……やっぱり？

そうだ、やっぱり僕はこの光景を見ている。デジャ・ビュとかいう奴だろうか。昨日、ちょうど同じような時間だった。

いや、どうもそれどころじゃない気がする。

その前もその前も、きっと何度も見ている。夕陽に映える彼女の後ろ姿を追っている。

なぜ？

俺はどうにかなってしまったのか？

まさか、この日から先には進めないとかいう、いささかファンタジーめいたことが俺の身に起こっているのだろうか。そうすると厄介だ。どうにかして抜け出さなければ。

そう思ったときだった。

『行こうよ』

「え？」

声が聞こえた。もちろん、彼女ではない。それとは別の、もっと幼い女の子の声だ。聞き覚えはあるのだが……。

振り返る。が、誰もいない。

「どしたの？」

彼女が訝しんでしまったじゃないか。バカバカしい。どうも今日の俺は疲れているらしい。この疲労を明日にまで持ち込んで、デート中に欠伸でもすれば、きっと危険な結末が待っている。どう危険かは詳しく分からないが、とにかくアブナイのだ。

「ありがと」

気がつくと、駅に着いていた。

「明日、ここで、八時ね。遅れないでよ？」

「あ、ああ」

「大丈夫？ 自分で起きられるよね？」

彼女はいたずらした子供を叱りつける母親のように厳しかった。

「ちゃんと」

ああ。きっと何とかなるよ。

「自分で、起きられるよね」

彼女の声のトーンが下がり、僕の心拍数は、恐らく十ばかり跳ね上がった。

「そ、そんなに心配しなくても」

「そ」

見上げるとそこにはいつも通り、僕の大好きな笑窪(えくぼ)を見せる彼女がいた。

「じゃあ、またね」

改札の向こうに消えていく彼女。

まただ。

踏切が鳴っている。

当然だろう。ここは駅で、電車が止まるべき場所なのだ。踏切も鳴れば警笛も鳴る。

警笛が歪む。

車掌の笛の音が、どこかとても遠くから鳴っている気がする。

『切符は持ってるかい？』

やけに馴れ馴れしいな。持っていないよ。

『どこまで？』

どこだったけか。とっさに駅の名前が出てこないじゃないか。

『もう、行ってしまったよ』

車掌さんは残酷なことを言ってのける。その瞬間、涙が溢れてきた。

ほら、だから送った後にはこうして号泣ものの別れが訪れるのだ。

『戻ろうよ』

また、少女の声。そして僕もまた、とっさに答えてしまうのだ。

「いい」

それから先の記憶がない。

記憶は、ない。

けれど思い出せることが一つだけあった。

ずっと昔、まだ僕が幼かった頃のことだ。たぶん、まだ学校に行っていなかった頃。

家の近くにある、大きな公園に僕はいた。

ブランコが揺れる。その上に僕は腰掛けていた。

「行こうよ」

後ろから声がした。

姉さんだった。迎えに来たのだろう。夏の夕暮れは遅い。今は、七時ぐらいだろうか。

セミが鳴いてる。アブラゼミが、昼よりも少し大人しく。

「いい」

ブランコの鎖が冷たい。夏なのに。

鎖がキイ、と鳴った。何だか、胸がスースーする。

「置いてかれた」

いつの間にか、かくれんぼは終わっていた。

「仕方ないよ」

姉さんの声は笑っていた。別に何もおかしくなんかないのに。

「最後にかくれんぼなんて、するからだよ」

とても仲が良かった友達が、急にいなくなると知ったのは、昨日だった。僕はどうしていいのかわからなかった。意味がわからなかったのだ。

だって、なぜ急にいなくならなければならないのだろうか。なぜ、「明日から来ないから。ばいばい」と言われて、すんなり頷けるのだろうか。

だから、かくれんぼをしよう、と言った。あの子が鬼なら、僕を見つけるまでは止めない、そう思ったから。

でも、違った。

「さっき、おばさんが迎えに来たんだよ。もう、電車来ちゃうから、行くよって」

「ふうん」

何でもない風を装った。でも、お腹がヒクヒクと動くのが止まらなかった。

「はい」

姉さんから渡されたのは紙袋だった。

「あの子から。こういうときは、プレゼント、するものだよね」

中を開けると、丸いクッキーと一緒に、「さようなら。またね」と書かれたカードが入っていた。

「行こうよ」

行こうよ。行こうよ。イコウヨ。

何度も心の中で跳ね返って。いつまでも消えない。

セミが、泣いてる。声が歪んで聞こえるから、泣いてるのだ。

「いつまでもここにいても、仕方ないよ？」

ほら、と渡されたのは、手紙だった。昨日の夜、寝る前に書いたのだ。

でもそれは、渡さないと決めていた。濡れて、鉛筆で書いた跡がすっかり汚れてしまったから。「またあそぼうね」とは読めなくなってしまったから。

「電車、七時だって」

姉さんが背中を押す。

「間に合うかも。だから、ね？」

僕は走り出した。

手紙を握りしめて。

息が切れるのを堪えながら。

改札にたどり着いた頃には汗だらけになっていた。

駅員さんの顔がよく見えない。もう太陽が沈みかけているのだ。

「切符は持ってるかい？」

持っている訳がない。僕はどこにも行かないのだから。

「どこまで？」

分からない。どこまでだろう。

いや、違う。

「ホームまで。渡すだけ。手紙を」

喉の奥が干からびている。

ところが、駅員さんは、悲しそうな顔で首を横に振った。

「もう、行ってしまったよ」

どうやら、駅員さんには僕が何をしたいのか、全て分かってしまったらしい。そして、それが無理であることも知っていた。

電車は出発していて、それに彼女は乗ってしまったのだ。出発してしまった電車は、もう戻れない。

「仕方ないよ」

姉さんは笑顔だった。

「また、会えるよ。ね？」

僕はこみ上げてくるものを我慢できなかった。

「うん、うん」

何となく理解しつつあった。

なぜこんなことを思い出すのか。

なぜこんなことを思い出さなければならないのか。

「明日」

立ち止まる彼女。

この光景を、確か昨日も見た。

いや、これは何度も見た光景だ。記憶に深く刻まれている。幾度となく同じことを思い出しているというのだろうか。やはり僕はここから先には進めないというのか。

風は鳴り止まない。身を切るような風がごうごうと吹き荒れている。季節はもう冬だろうか。雪でも降りそうな気候である。

「……そうじゃないよ」

彼女の声は沈んでいた。

「えっ？」

風がピタリと止む。アブラゼミの鳴き声が聞こえる。その音は段々と大きくなった。それに混じって、列車の車輪が線路を叩く音が、さらに大きく僕の耳を劈(つんざ)く。

季節外れの音は急に止み、また強い風が吹き始めた。

「明日、何の日か知ってる？」

ああ。

「……知ってる」

そうだ。きっと僕は、ずっとここにいたかったのだ。思い出してしまわなければ、というより、決意ができなければ、それこそ永遠に。

「君が……」

そこから先は言葉が出なかった。

明日は、遊園地に行く日。

そして君が。
死んでしまう日。

カラスがけたたましく鳴いた。何かの啓示のように。
アブラゼミの鳴き声が聞こえる。
走っていく子供の笑い声。
電車の警笛の音。踏切の音。
地面を蹴る、スニーカーの音。
線路の枕木を叩く、車輪の音。
幸いなことに、その他には何も聞こえなかった。
けれど、それが、その日に起こった現実。

「やっと、認めてくれたんだね」
風は止み、西日を背負って、彼女は立っていた。
かくれんぼは、終わったんだ。
彼女の表情は見えない。逆光のためか、顔だけが影になっていた。
それでも、僕は彼女の顔をはっきりと覚えている。
「明日、私はいない」
一片の風が吹く。冷たい風だった。
夕陽の向こう。
「私はいない」
もう、終わりにしなければ。彼女のいない世界を受け入れなければ。向こう岸に送らなければ。つなぎ止める気持ちを、絶たなければ。
「どうやったって、私は死んだのだもの」
「悲しいこと言うなよ」
返事はなかった。
彼女の髪は揺れていた。きっと、笑っているのだろう。第一、その顔しか思い出せない。
夕陽が、名残惜しそうにゆっくりと落ちていく。彼女の姿が闇に溶けて、やがて吸い込まれていく。
僕ができることは、何も無い。
手紙も渡せない。
どうしようもない。同じなのだ。全て。
「行こうよ」
はっきりと声が聞こえた。振り返ると姉が立っていた。あの頃の背丈と、あの頃の表情で。
そうか。
彼女には彼女の向かう場所がある。
僕には僕の向かう場所がある。
夕陽の向こうに進んでいくのだ。二人で一緒に。どちらかが取り残される訳ではない。
ここはさよならの場所。誰も留まっていはいけない場所。
帰らなければならぬ。それが、ただ一つの道。いつまでも駅の前で駄々をこねている訳にはいかない。
「さようなら」
彼女の声は冷たく、僕のお腹の底からは何かがかみ上げてきた。
「さようならは。寂しすぎるよ」
ようやくそれだけが言えた。それだけのことを、言えるようになった、と言うべきかもしれない。違うのだ。あの頃とは。
「そう？」
彼女の声が遠ざかっていくのが分かる。でも、少しだけ、声に色が戻っていた。
「じゃあ……、またね」

永遠にお別れになることなんて考えず、何度となくその挨拶を繰り返してきた。
だから、今は。
「またね」

自分のその声できっぱりと目が醒めた。

薄暗い部屋の中、布団から僕の頭だけが出ていた。目尻を手でこする。涙が走った跡があった。枕がうっすらと濡れている。僕は、泣いていたのだろう。

起き上がって軽く頭(かぶり)を振ると、意識がはっきりとしてきた。

彼女はいない。

夕陽の向こう側で、それでもきちんと夜は明ける。人が一人消え去ったとしても、正しく世界は回ってしまう。僕は、少しだけ取り残されていたようだ。だから同じ場所をぐるぐると回っていた。

こんな夢、必要じゃなかった。だって、どうせ夜は明けるじゃないか。

彼女の死を受容できなかったとしたら、僕は死んでしまうのか？ バカバカしい。心臓は拍動を続け。朝になれば睡魔から解放された頭は明るい世界を取り戻す。

死んだって何も変わらないのだ。悲しいけれど。

「起きた？」

姉が扉の向こうから顔を覗かせた。

「……ノックしろバカ」

自分で自分の口から出る言葉を、何だか平べったいと思う。姉は一言ゴメンと謝って、

「今日、どうする？」

と言った。

「行かなきゃならんだろ、そりゃあ」

「そうだね」

既に姉は着替えていた。きちんとした喪服姿を見るのは、これが初めてかもしれない。

「姉さんも行くの？」

少し驚いて訊ねた。

「だって部活の後輩だよ。知らなかった？」

ため息混じりの声は、悲哀と落胆とを感じさせた。

そう。悲しいのは自分だけではないのだ。

一つの生命が無くなること、それ自体はある意味何でもないことにしてしまえる。しかし、一人の人が亡くなること、それはとても重いことであり、簡単にはいかない。だから僕らの体は正しく動いても、涙を流さなくてはならない。そういう風にてきている。

みんなその人が存在する世界を生きていた。でも、もういない。どう足掻いても、元には戻れない。その人のいない世界を生きていかなければならない。

それは、転居の別れとは違う。けれどどこか似ている。その人のいた風景が過(よ)ぎる度に、どうしようもない喪失感が去来する。僕らは思い出すだろう。その度に苦しむだろう。

それぞれの生きる世界が、いないことを受け入れて、それでも回り続けることを望んだとき、少しだけ救われた世界が訪れる。忘れてしまったのとは違う、いつものように笑える世界が。

誰もがそれを望んでいる。僕も、僕の家族も。そしてきっと、彼女も。

だから、僕は起き上がらなければならない。

体ではなく、心で、起き上がらなければならない。

ベッドから体を起こし、カーテンを開けた。淡い光が窓から差し込む。空もまた、目を覚ましたばかりであるらしい。

朝焼けと朝靄の向こうに、僕はそれを見た。ほんの、一瞬だけ、彼女はそこにいた。

「嘘ばかり」

いないなんて、嘘だ。君はまだ、そこにいる。僕が世界に墓標を築くまでは、まだ。

「アイロン、掛けといたから」

真っ白なシャツと、真っ黒なタイが、当たり前のように壁に掛けられていた。これを着なければならぬのだ。これもまた、一つの道のり。今日乗り越えなければならぬ、一つの苦しみ。

世界はくるくると回る。たとえ彼女がいなくても。キイキイと軋みながら、悲しいほどに、美しく回る。

彼女はいない。

僕は確かに、ここにいる。

[戻る](#)